保健活動の現場における看護学生の学習過程に関する研究

―保健師活動の特性に関する理解を促す実習指導保健師の関わり―

三宅　久枝　伊豆　麻子　中川　泉
新潟青陵大学看護福祉心理学部看護学科

Research Relating to the Learning Process for Student Nurses in Community Health Activities

：Intervention by Nursing Practice Supervisors to Encourage Understanding of the Special Characteristics of Community Health Nurses' Activities

Hisae Miyake, Asako Izu, Izumi Nakagawa
NIIGATA SEIRYO UNIVERSITY DEPARTMENT OF NURSING

要旨

保健活動の現場における看護学生の学習過程について、看護学生の地域看護学の臨地実習経験から、保健師活動の特性に関する看護学生の理解を促す実習指導保健師の関わりの過程を明らかにすることを試みた。4 年制 A 看護大学の看護学生 10 名に対して、保健師活動の特性を理解することができたと実感した場面と、その場面における実習指導保健師の指導や関わりについて半構成的インタビューを行い、修正版グランウンデッド・セオリー法を用いて分析した。

その結果、看護学生に対して実習指導保健師は、保健活動の場を構成している保健師や住民、関係者の中に看護学生を参加させることを促して、保健活動の≪輪に入れる≫ことを行っていた。更に、保健活動を看護学生に体験させる中で、保健師が捉えた看護の対象像や、保健活動実践上の困難や課題を学生と共有できるような働きかけを行っていることが示唆された。

キーワード

看護学生，保健活動，地域看護学実習，実習指導保健師，関わり

Abstract

Looking at the learning process for student nurses carrying out community health activities in the field, an attempt was made based on the practical experience of nursing students studying community nursing, to clarify the way in which intervention by community nursing practice supervisors encouraged students' understanding of the special characteristics of community health nurses' activities. Ten student nurses at a four-year nursing university, A, were interviewed in a semi-structured way about settings where they felt they had been able to understand the special characteristics of community health nurses' activities and about guidance and intervention from community nursing practice supervisors in these settings. Findings were analyzed using the revised version of the grounded theory method.

Results showed that community nursing practice supervisors encouraged student nurses to participate in community health activities in settings made up of public health nurses, residents and other persons concerned, and brought them into the “community health activity circle.” Moreover, it was also implied that by letting student nurses have hands-on experience of community health activities, nurses encouraged them to share their own image of nursing and also to share difficulties and issues arising from the practice of community health activities.

Key words

student nurse，community health activity，community nursing practice，community nursing practice supervisor，intervention

Ⅰ　緒　言

近年、わが国における保健師の養成は、4年制看護系大学にて看護師と保健師の養成課程を合わせた「保健師・看護師統合カリキュラム」によって行われることが主流となっている。4年制看護系大学における保健師の専門教育は、主に地域看護学分野で行われているが、その教育は、1年課程の保健師養成学校に比べて、保健師に特化した講義や演習、現場実習時間が少ないこと等から、保健師の専門性や技能の習得に問題があるとされている。[1,2] このことから、4年制看護系大学における保健師教育の充実は喫緊の課題となっており、特に、地域看護学の現場実習の充実が求められている。

4年制看護系大学の地域看護学の現場実習は、病院等における医療機関での臨床実習とは異なり、地域住民への家庭訪問や、住民のボランティアやグループ活動への参加、市町村や保健所の保健福祉活動（以下、保健活動と略す）への参加等、地域に暮らす多様な人々の暮らしの中で展開される。学生は、その複雑な人々の暮らしの営みの中に、看護学生として参加し、実習指導者である保健師の指導や支援を受けながら、保健師の専門性や技能の理解を深めていく。こうした現場実習での学習の成果については、実習終了後のレポートや、学生、または、教員の実習評価を記述した実習記録から、学生が獲得した学習内容を分析対象とした研究が多く、それらの研究では、保健師の専門性や特定の技術を「知識」「技術」として習得できたか否かに焦点があてられている。[3~5] しかし、現場実習の場である複雑な暮らしの中で、看護学生が実習指導保健師からどのような指導や支援を受けて保健師の専門性や技能を習得していくのか、看護学生と実習指導保健師で営まれる学習のプロセスに着目した研究は、地域看護学分野では少ない。

そこで、4年制看護系大学における保健師教育に関する現場実習を充実させるために、4年制看護系大学の看護学生が、地域看護学の現場実習の中で、保健師活動の特性を理解した場面において、学生を直接的に指導する実習指導保健師が、学生に対してどのような「関わり」（指導・支援）を行っていたのか、その「関わり」の過程を、学習の主体である看護学生の視点から明らかにすることを本研究の目的とした。

Ⅱ　研究方法

本研究は、帰納的アプローチによる質的記述的研究方法とした。

1　研究対象

4年制のA看護大学にて2007年もしくは2008年に行われた地域看護学実習を終了した看護学生10名を対象とした。

2　データ収集方法

対象学生が地域看護学実習を終了した2～14ヵ月後に、研究者1名対対象学生1名で、50分から70分程度の半構成的なインタビューを個室にて実施した。インタビューは、2008年10月から11月に行った。

インタビューでは、対象学生が保健師活動の特性を理解することができたと実感した場面を想起してもらい、その場面における学生や保健師、住民や活動の関係者の様子、学生に対する実習指導保健師の関わり（指導･支援）を具体的に語ってもらった。

インタビュー内容は、音声録音機器にて録音し、その後、録音内容の逐語録を作成した。

3　データ分析方法

修正版グラウンデッド・セオリー法[6]を使用した。具体的には、インタビューの逐語録から、対象学生が保健師活動の特性を理解すること

ができたと実感した場面を特定して、その場面における実習指導保健師の「関わり」に該当する文脈を抽出してデータとした。そして、抽出した各データを解釈しながら、実習指導保健師の「関わり」に関する概念を作成した。更に、作成した概念を用いて、実習指導保健師の看護学生に対する「関わり」の過程について構造化を試みた。

これらの分析過程において、抽出したデータ、および、その概念化・構造化は、研究者間で検討して修正を繰り返して、分析の信頼性・妥当性を高める努力を行った。

4　倫理的配慮

本研究は、対象学生の所属大学の看護教育責任者の許可を得た上で実施した。

対象学生へは、本研究の目的･方法、および、研究協力の辞退によって不利益が生じないこと、インタビュー内容は成績や今後の学習に不利になることはないこと、収集したデータは研究目的以外には使用せず研究者のみが厳重に管理すること、逐語録は個人が特定されるおそれのある記述はアルファベットを用いて表記すること、公表は匿名性を確保した形で行われること、研究協力に同意した後でも辞退は可能であることを、書面を用いて説明して、研究協力への同意を得た。

Ⅲ　結　果

1　対象学生および対象学生が体験した実習の概要

インタビューを行った看護学生は、A看護大学３年次および４年次生８名と、看護師免許を有する編入学生２名であった。

対象学生が体験した地域看護学実習は、A看護大学の所在地域、および、その周辺地域の保健所、市町村役場、または、市町村保健センターを実習場として、そこで展開される保健活動（家庭訪問、健康教育、健康診断とその事後指導、健康相談等）や保健医療福祉関係者との連絡調整会議、住民グループ活動に参加をするもので、実習期間は約10日間であった。また、編入学生２名以外は、地域看護学以外の看護専門分野の臨床実習を一部（精神看護学、老年看護学、小児看護学のいずれか）を除いてほぼ終えた状態で、地域看護学の現場実習を行っていた。

2　対象者が保健師活動の特性を理解することができたと実感した場面の概要

インタビューの中で、対象者が保健師活動の特性を理解することができたと実感した場面としては、①障害者や特定の疾病に罹患した患者・家族の集い、障害者や生活習慣病罹患者、虐待が疑われるケースへの家庭訪問、療育教室、子供の遊びの広場等の親子の集い、子育て支援に関するセミナー、各種健康診断等、保健師が住民に対する直接的なサービスを関係者や住民とともに提供している場面、②①のサービスの提供前後に行われた保健師と関係者との打合せや準備・後片付けの場面、③保健師と住民、関係者で開催された保健活動計画の策定会議の場面、④実習学生が参加する保健活動の説明を実習指導保健師が行った場面、⑤保健活動参加後の実習学生と実習指導保健師のカンファレンスの場面、⑥①から⑤以外の場面（実習指導保健師との雑談、保健師同士で相談している様子等）、以上の６種類の場面があった。

3　看護学生が保健師活動の特性を理解することができたと実感した場面における実習指導保健師の「関わり」に関する概念と「関わり」の過程

インタビューの逐語録を分析した結果、対象学生が保健師活動の特性を理解できたと実感した場面における実習指導保健師の「関わり」に関して、１つの中核的概念と、その他８つの概念が抽出された。

そして、抽出された概念について、実習指導保健師の学生に対する「関わり」の過程の構造化を試みたところ、１つの中核的概念に向かって６つの概念が存在し、それらの７つの概念が帰結した後、互いに関連する２つの概念が続いて存在していた。（図１）

以下、中核的概念を≪　≫、その他の概念を＜　＞で示す。各概念に関するデータは、**ゴシック体・小文字**にて文頭にインタビュー対象者のID番号を付けて示す。なお、データで前後の文脈がわかりにくい箇所は（　）の中に言葉を補い、「…」は中略、文脈に直接関係しない箇所は省いた。

１）中核的概念≪輪に入れる≫

この概念は、実習指導保健師が、地域住民や保健活動の関係者、保健師らで構成され、展開されている保健活動の「場」に、その「場」の構成員として学生を参加させることを促すというものである。

実習指導保健師は、２）以降に示す＜説明しながら率直に語る＞＜雰囲気を和らげる＞＜つなぐ＞＜背中を押す＞＜みせる＞＜スタッフとして扱う＞を行いながら、学生を保健活動の≪輪に入れる≫ことを促していた。そして、実習指導保健師は学生を≪輪に入れる≫ことをとおして、学生が活動に参加している住民や関係者、保健師のそれぞれの目線に立ち、活動の各参加者が体感または思考していることを学生が共感し推察することができるように働きかけていた。

【ID4】（療育教室の準備や受付を行っていた学生に対して保健師が）「もう中（子供たちが遊んでいるところ）に入って遊んでいいよ」って言われて…発達障害とかがある子たちだったので、はじめちょっとどうか関わっていいかわかんないんでちょっと戸惑う部分もあったんですけど…、スタッフさんと子供たちが関わっている中に自分（学生）たちも一緒に入るみたいなふうにして入れたんで…慣れているスタッフさんとかが（子供に）「じゃあこれお姉ちゃん（学生）にあげてね」とか言って輪に入れてくださったっていうのはありました。

【ID4】（遊びのひろばに学生が参加した際に）この場ではみなさん（保健師やひろばのスタッフ）が、なんていうかな、学生としてじゃなくて、また遊びにきてねとかそんな感じで同じ目線で話してくれるし聴いてくださるっていう感じだったから、だから一緒にやっているっていう感じがしたのかなと思います。…勉強に行っているというよりはほんとに一緒に遊びに行っているっていう感じで

２）＜説明しながら率直に語る＞

この概念は、実習指導保健師が学生に対して、学生が参加する、または、参加した保健活動の説明を行う中で、保健師が捉えた活動の対象像や対象との関わり、活動の経緯や現状を率直に語るというものである。

実習指導保健師は学生に対する説明の中で、保健師と保健活動の対象者との関係性やその関係に基づいて展開されてきた活動の様子、そして、現在の姿を率直に語り、学生がリアリティーを持って保健活動の展開や対象の様子を理解することができるようにしていた。

【ID2】（重度の糖尿病で治療を拒否している住民の家庭訪問の前に保健師が訪問対象者について）「家の中とかちょっと埃たまっているかもしれないから…」って聞かされて、…、（訪問に行く車中で保健師から）なんでその方に家庭訪問がはじまったのかっていう話を聞かされて、…、糖尿病を放置しているっていうのをお医者さん（訪問対象者の主治医）から（保健師へ）連絡がきたっていうのと、…、向かいの家の人が夜になっても灯りがついてないなっていうのを見てそれを確認しに行ったら（訪問対象者が）倒れてたっていうのがあって。…で、最初は（保健師が訪問対象者へ）電話して「こうこうこういうわけだからちょっと訪問させてください」っていう話をして行ったんだけど、鍵が開かない（訪問対象者が玄関を開けてくれない）のよみたいな話を聞かされ

て、…、でも（保健師が）根気強く（家庭訪問に）行くようになったら、ちょっとずつ（訪問対象者が）玄関開けてくれるようになって、…、みたいな感じの話を聞きました。

３）＜雰囲気を和らげる＞

この概念は、実習指導保健師が、保健活動の「場」の新顔である学生を迎える住民（保健活動の対象者）の緊張や、活動の「場」に参加する学生の緊張を解して、その「場」を和ませるというものである。

実習指導保健師は、＜雰囲気を和らげる＞中で、学生が保健師へ関わりやすいような関係を築き、また、学生がリラックスして保健活動の「場」に参加することができるようにしていた。また一方で、「実習」という一時的な参加者であり、保健活動の「場」に初めて登場する学生を迎える住民に対しても働きかけ、住民が学生を「場」に受け入れ、住民側からも学生へ関わりやすくすることができるようにしていた。

【ID2】保健師さんがすごいラフな感じっていうか、…（学生へ話す際に）方言とか交えてくれて、なんか学生との距離を縮めてくれようとしてくれたのがなんかわかって、…（保健師と）初めて顔合わせをするとき、（保健師が）「私も学生さんと同じ白のポロシャツ（実習時の服装）にしてきたの」とか言ってくれて、なんか学生を迎え入れてくれるというか…

【ID1】…（家庭訪問時に対象者へ）「今日学生さんがいるのでよろしくお願いしますね」って言って、でもそのあとはわりとむこう（訪問対象者の）気持ちをほぐすじゃないですけど、…「こないだ奥さんどう？」とか、例えば、（訪問対象者が）成人の方だったら稲、畑の話から入ったり（話を始めたり）とか、というところで空気（その場の雰囲気）をよくしてくれる…

４）＜つなぐ＞

この概念は、実習指導保健師が、保健活動の「場」の新顔である学生と、活動の「場」の構成者である住民や関係者との間を取り持って、両者の関係づくりを促すというものである。

実習指導保健師は、この＜つなぐ＞をスムーズに行うために、学生を「場」の構成者に紹介するだけでなく、住民・関係者の間に学生を座らせる等、「場」に参加する学生の立ち位置に配慮したり、両者が話しやすいような言葉かけを行ったりしていた。

【ID1】最初はやっぱり（家庭訪問で対象者のお宅へ訪ねた際に対象者へ）「学生さんが今日いるのでいろいろ話してあげてね、みたいな。…保健師さんは（訪問対象者と）顔見知りだから、（学生の）一言目がうまく出るようにいい空気づくりをしてくれたりとか…

【ID4】…カンファレンス（保健事業実施前のスタッフの打合せ）の場に学生も連れてってもらって…ひとまず（学生が）挨拶をしてスタッフさんが集まってきたところで（保健師が）「そこの椅子出して（学生も）座っていいよ」って言ってくださって、それもちゃんと（スタッフが座っている）円の中に入れて（保健師がスタッフと学生の間に入って）一緒に話してくださって、（スタッフの）後ろとかじゃなくって…

５）＜背中を押す＞

この概念は、実習指導保健師が、学生が主体的に保健活動の参加者（住民・関係者・保健師）と関わったり、活動の対象への支援を学生自ら提供したりすることができるように学生を促すというものである。

実習指導保健師は、この＜背中を押す＞ことで、看護専門職としての対象との関わりや看護サービスの提供を学生が体験することができるようにしていた。

【ID9】（神経難病の患者会にて）最初に問診をとったり血圧を測ったりするんですけど、それを、問診は保健師さんが聴いているところを見学させてもらってて、そのあとに血圧を測るときに（保健師が参加者へ）「学生なのでさせてください」って言って、なんかそういう関わりをもてるように、なんかそういう（学生が参加者と関わ

る）時間っていうか、そういう（学生が参加者と関わることができる）きっかけみたいなのはつくってくれました。…保健師さんの方から「じゃあ血圧測ってもらおうかな」っていう感じで声をかけてもらえたので…

【ID1】（住民のグループ活動に参加する際に）最初は（会場の）端のほうで眺めてて、（保健師が学生に対して）「もう、ここ座りな」っていう感じで「もっと話しな」みたいな感じで、どんどん誘導してってもらって、（住民が座っている場所の）真中に入れてもらって、それで座ったら（住民から）「どっから来たの？」とかいろいろ話しかけてもらうみたいな感じでした。

６）＜みせる＞

この概念は、実習指導保健師が、保健活動が展開されている様子や、保健師・住民・関係者のやりとりのありのままを学生に見せるというものである。

実習指導保健師は、学生を保健活動の「場」に参加させて、学生が「場」の構成者と関わることができるようにするだけでなく、保健師が行っている対象への支援や、やりとりの実際を積極的に学生に見せて、専門職としての保健師の思考や行為を推察させ、また、対象者・関係者の実像が理解できるようにしていた。

【ID5】（乳幼児健康診断が終了した後のスタッフカンファレンスで、保健師を含めたスタッフが）まずなんか今日のよかった点、悪かった点とか必ず言って、じゃあ次（次回の健診）はこうしようっていうのがあって、あとちょっと気になった子（健診を受診した児）とか気になった人（児の保護者）みたいな、名前をずらーっとあげていったりして、そこから今度じゃあこの人に働きかけなきゃね、みたいな話もされていたし…次もっと良くするにためにはなんだろうっていう話もあったし…

【ID9】食育のネットワークの話（住民代表者・保健師・関係者との会議）とかにも（学生が）参加させてもらって、すごいみんな（住民代表者・保健師・関係者）グループで結構ディスカッションじゃないですけど、ものすごい意見を言い合ったりとかして、こういう計画（食育に関する活動計画）立てるのにも、意見出し合ってからじゃないとすごいいいものができないっていうか…

７）＜スタッフとして扱う＞

この概念は、実習指導保健師が保健活動の展開場面において、学生を「実習生」として扱いながらも、活動に従事する一人の「スタッフ」として学生を扱うというものである。

実習指導保健師は、学生を＜スタッフとして扱う＞ために、保健活動の展開に必要な仕事（会場設営、参加者の介助、レクリエーションの実施等）を学生に割り当てたり、学生に割り当てた仕事や、活動に参加した対象に対する学生自身の考えを引き出すようにしたりしていた。また、これをとおして、学生が看護専門職としての思考を働かせながら、活動の「場」に参加できるようにしていた。

【ID4】（療育教室の遊びの際に学生が何をやればよいのか）どうしよ、どうしよって悩む場面はなくて、むしろ（学生が保健師へ）なんか言う前に「じゃあこっち来て片付けて」とかっていう指示をくださったので、ほんとやりやすかったです。…（教室終了後のスタッフカンファレンスで保健師やスタッフが参加した子供の）一人一人のことについて言って（状態を話し合って）いて、で、（保健師が）「学生から見てどうだった？」っていうふうな質問もあったので、そこから（参加した子供の状態についての）話が（保健師やスタッフの間で）ひろがるっていう感じもあったので、ほんと中に入って学べたっていう感じがしました。…（学生が）ひとりのスタッフとして（療育教室に）いるよう、いるっていうかそんなように感じました。

８）＜学生に語らせる＞

この概念は、実習指導保健師が保健活動終了後に、学生に活動に参加した率直な感想を発言させるというものである。

この概念は、前述の中核的概念≪輪に入れ

る≫とそれを取り巻く６つの概念の後に、９）に示す＜本音で語る＞とともに出現していた。

実習指導保健師は、まず学生に保健活動に参加して得た率直な感想を＜学生に語らせる＞ことを行ってから、それを受けて、＜本音で語る＞ことを学生に行い、活動に参加していた対象像や、活動で発揮されていた保健師の機能の理解へと学生を導いていた。

【ID9】（保健事業終了後の指導保健師と学生のカンファレンスにて）カンファレンスはなんかそんなにかしこまった感じではなくって、（保健師が学生に対して）「なんか今日どうだった？」みたいな感じで「じゃあ一人ずつなんかあったら言ってもらおっかな」みたいな感じで一人ずつ話しました。

【ID4】（実習中）毎日（学生が参加した）事業が終わった後にカンファレンスをして、そのときにみんなそれぞれ感想を言うんですけど、なんかはじめのほうは保健師さんの仕事というよりは、なんか事業自体に目が向いていてみんなの感想もこの事業はこういうことがあってこう思ったっていうふうな、…、なんかそのみんなが感想言い終わった後に、（保健師が学生に対して）「じゃあ保健師の役割は気付けた？」っていうふうに聞いてくださって…

９）＜本音で語る＞

この概念は、前述の＜学生に語らせる＞を受けて、実習指導保健師が学生に対して、保健活動の問題点や活動を展開していく中で生じる困難、保健師が抱く対象へのおもいや願い、保健師としてのやりがいや苦労を率直に話すというものである。

実習指導保健師は、保健活動に参加した率直な感想を＜学生に語らせる＞ことを行ってから、学生に＜本音で語る＞ことを行い、複雑な社会の中で生じる問題や、保健活動を行っていく上で発生する困難に対して、どのように対処しているのか、保健師の思考や行動を学生がイメージ化できるようにしていた。

【ID6】（アルコール依存症の夫とその妻への家庭訪問終了後の役所へ帰る車中で）…旦那さんが暴れてどうしようもないときがあって、そのときは保健師は女だから一人や二人じゃどうしようもない（夫の暴力を制止することはできない）から、男の（役所の）職員を呼んでとめてもらったみたいな感じで（保健師が学生へ）言ってたり（訪問対象者の経過を説明したり）とか…、で、そうい

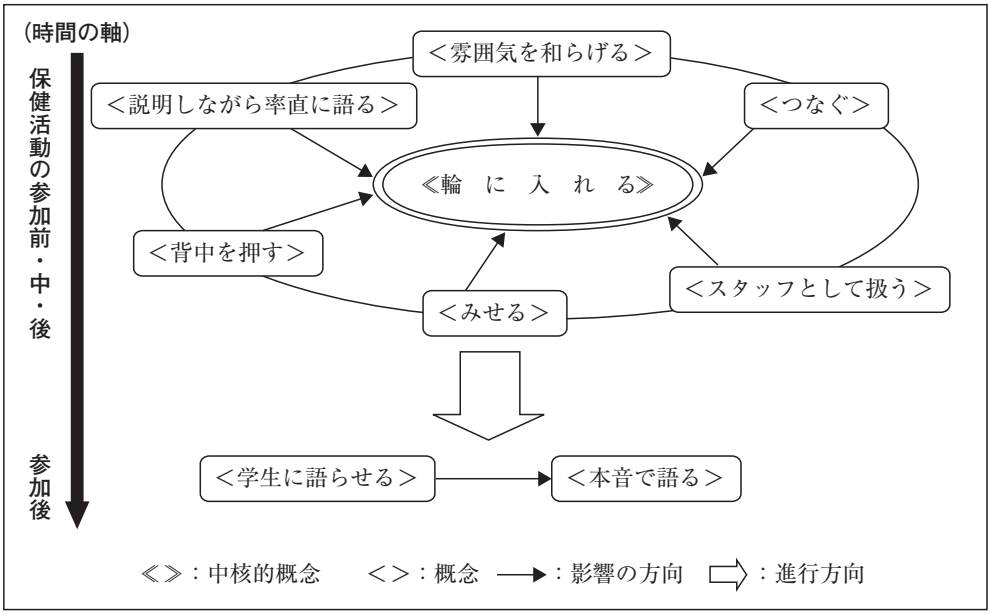

図１　看護学生が保健師活動の特性を理解した場面における実習指導保健師の「関わり」の過程

うとき（夫が暴力的になった際）の対応策についても（関係者と保健師が）話してるんだ（相談している）みたいな、（夫が暴力的になっている時に）奥さんをどこに避難させるとかさ、（実際は）難しいんだよねとか、まあそういう話をしたりとか…。

【ID5】（脳卒中後遺症の患者会に）参加する前に、（保健師から）「この人たち（会の参加者）はこういうグループです」って話を聞いて、で、今までちょっとやってたもの（会の様子）を見たんですよ。…その指導者さん（患者会の担当保健師）自体、なんか（患者会の運営に）迷ってて、どうしたらもっと（会が）活性化できるかみたいな（ことを学生へ話した）…

Ⅳ　考　察

看護学生が保健師活動の特性を理解することができたと実感した場面における実習指導保健師の「関わり」の概念と、抽出した概念を構造化した結果から、実習指導保健師の看護学生に対する「関わり」の特性について、次の２つが考えられた。

１　看護学生の学びに対するモチベーションや主体性を引き出す「関わり」

本研究では、実習指導保健師は看護学生を保健活動の≪輪に入れる≫、つまり、看護学生が保健活動の「場」に加わり、住民や保健師、活動の関係者とともに保健活動を展開する「場の構成者」となるように看護学生を導くことで、学生の保健師活動の特性に関する学びを促していた。

更に、実習指導保健師は、看護学生が保健活動を展開する「場の構成者」に、スムーズに加わることができるように、＜説明しながら率直に語る＞ことで学生が参加する「場」の構成者やその「場」でおきていることをイメージ化させたり、＜雰囲気を和らげる＞ことで学生と活動の対象者の緊張を解して「場」の新顔である学生をスムーズに迎え入れるようにしたり、＜つなぐ＞＜背中を押す＞ことで、学生自ら「場」に入って活動の一端を担うことができるようなきっかけづくりを行ったりしていた。

富田らは、実習指導保健師の「具体的でわかりやすい説明」「現場保健師による過度な期待がない」等の指導手法が、看護学生の地域保健活動の関心度を高めることを指摘している[7]。本研究では、実習指導保健師の関わりとして＜説明しながら率直に語る＞＜雰囲気を和らげる＞が特定されているが、これらの実習指導保健師の関わりは、富田ら[7]が指摘しているように、看護学生の保健活動への関心度を高めることに作用するとともに、学生の緊張を解して、学生の個性やこれまで培ってきた看護職としての能力を発揮しやすくすることへも作用するものと考える。また、実習指導保健師は、＜説明しながら率直に語る＞＜雰囲気を和らげる＞とともに、＜つなぐ＞＜背中を押す＞ことで、学生が保健活動の「場」の中で看護の対象との関係づくりや看護サービスの提供を行うことができるようにしていたことから、学生に対して一方的に学びの「場」や「機会」を与えるのではなく、学生の現場実習に対するモチベーションを高めて、学生自ら主体的に学ぶことができるように働きかけていたと考える。

更に、それらの働きかけは、看護学生に対してだけではなく、保健活動の「場」の構成者である住民や関係者に対しても行われていたことから、学生側、住民・関係者側の双方が互いに関わりあうことができるようにしていたと考える。これは、実習指導保健師が≪輪に入れる≫ことで保健活動の「場」に学生を位置付けるとともに、その「場」で学生と住民・関係者の間で相互作用がおこるように、両者を取り持つ仲介者となっていたと考えられる。

2　看護学生との「共同注視」[8]を促す「関わり」

本研究では、実習指導保健師は≪輪に入れる≫ことで、看護学生を保健活動の「場」の構成者（住民、関係者等）となるような「関わり」を行っていた。また、この≪輪に入れる≫ために、学生に保健活動が展開されている様子や、保健師・住民・関係者のやりとりのありのままを＜みせる＞こと行ったり、学生を＜スタッフとして扱う＞ことを行ったりしていた。これらのことから、実習指導保健師は、看護学生を保健活動の単なる「見学者」として扱ったり、ある一つの切り取った場面の中で看護の実践を学生に体験させたりするのではなく、過去から続いて現在に至っている保健活動の「場」に学生を引き入れて、活動の文脈の中に学生を位置付けた上で看護の実践が行えるようにしていたことがうかがわれる。そして、看護学生が看護専門職としての保健師の思考・判断や行為を具体的に推し量ることができるようにしつつ、学生自身も思考し、判断して、看護を提供することができるようにしていたことがうかがわれる。

更に、実習指導保健師は、保健活動終了後に、保健活動に参加した率直な感想を＜学生に語らせる＞ことを行ってから、学生に保健活動の問題点や困難等について＜本音で語る＞ことを行うことで、専門職としての保健師の思考や判断、保健師が発揮する機能、看護の対象の理解を促していた。これらのことから、実習指導保健師は、保健活動に参加する中で学生が思考し、判断し、実施した行為について、学生自身が抱いた「感想」をきっかけとして振り返らせ、そして、学生が活動に参加した際には認知することができなかった事柄を具体的に示して、活動が展開されているその「場」や活動の文脈の中で「看護職としてどのように考えたらよいか？どうしたらよいのか？」といった看護職としての思考を学生なりに働かせることができるように促していたと考えられる。

佐伯は、状況的学習論からみた看護の学習について論じる中で、「共同注視」[8]の重要性を指摘している。佐伯は「共同注視」を「Aという人がXというものをみているときに、Bという人がAを見て、Aの目を見てその視線を追い、AがXを見ているということを認識し、そしてBもまた同じXを見る、つまり視線を対象の世界で結合させるということ」と説明し、更に、「共同注視」によって、互いに実践しているという共感が広がること、また、相手がやろうとしている意図を推察できるようになり、時間的な流れが読み取れるようになると述べている[8]。本研究で特定された実習指導保健師の「関わり」は、看護学生と実習指導保健師との「共同注視」[8]を促すものであり、これによって、保健師が捉えた看護の対象像や保健師としての思考・判断、保健活動実践上の困難や課題を学生と保健師で共有し、その上で学生は、看護的な思考を働かせて看護の実践を保健活動の「場」の中で行い、保健師のとしての専門性や技能に関する学びを深めていったと考える。

Ⅴ　研究の限界と今後の課題

本研究における実習指導保健師の「関わり」の過程は、すべて、看護学生が保健師活動の特性を理解することができた場面から抽出したものである。そのため、「理解することができなかった」といった反証的な場面がほとんどみられず、反証データによって検証を行うことが困難であった。このことから、反証データを加えて抽出した過程を検証する必要がある。また、本研究のインタビュー対象者は、すべて同一の看護系大学在籍者であることや、地域看護学実習終了からインタビューを行った期間について、対象者間で差があることから、複数の看護系大学在籍者を対象者

とすること、インタビューを行う時期について、地域看護学実習終了時期を考慮して、対象者間で差がないようにすること、以上が本研究の今後の課題である。

謝　辞

インタビューに応じてくださった看護学生の皆様に感謝いたします。

本研究は、平成20年度新潟青陵学会共同研究の助成により実施したものである。

また、本研究の一部を、新潟青陵学会第２回学術集会一般演題にて発表した。

注・引用文献

1）平野かよ子他．看護系大学，短大専攻課，専修学校別の保健師養成について　―教員と学生の保健師活動の認識等の実態調査．日本公衆衛生雑誌．2005；52（8）：746-755.

2）大場エミ．臨地実習の今日的課題．保健師ジャーナル．2008；64（5）：400-410.

3）山田淳子他．地域看護学実習における学生の学びからみた家庭訪問実習の効果と課題．日本地域看護学会誌．2008；11（1）：81-86.

4）小野順子他．大学教育における地域看護学実習の評価．日本看護学会論文集　看護教育．2008；(38)：237-239.

5）齋藤茂子他．地域の健康課題を中心とした地域看護学実習の有効性．日本地域看護学会誌．2005；8（1）：53-58.

6）木下康仁.グラウンデッド・セオリー・アプローチの実践　―質的研究への誘い.東京：弘文堂；2003.

7）富田早苗他．地域看護学実習終了時における学生の地域保健活動への関心度とその関連要因．日本公衆衛生雑誌．2008；55（2）：101-106.

8）佐伯胖．学習力を育む　現場で生きる実践知とは．日本看護学教育学会誌．2006；16（2）：39-47.